The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラームナガルの宗教劇ラーム・リーラーに関する研究資料
Author(s)	長崎, 広子
Citation	国立民族学博物館研究報告. 2003, 27(4), p. 753-788
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26956
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国立民族学博物館研究報告27(4): 753-788 (2003)

ラームナガルの宗教劇ラーム・リーラーに関する研究資料

長　崎　広　子*

Research Materials on the Religious Play *"Rāmlīlā"* in Ramnagar

Hiroko Nagasaki

インドの聖地バナーラスの対岸にある町ラームナガルでは，毎年ラーマ物語の野外劇ラーム・リーラーが藩王によって開催され，これは北インドで最も壮麗な宗教劇として知られている。熱狂的な祭は1ヶ月間続き，期間中ラーマ神をはじめとするヒンドゥー教の神々が町に滞在し，華麗な遊戯を繰り広げると考えられている。町全体が神々の世界をうつす劇場となり，ヴィシュヌ神の5人の化身を演じる少年は文字通り神として扱われる。本稿は，ラームナガルのラーム・リーラーの祭をとりあげ，そこにみられる演出，演技，劇空間，時空の特色，さらには祭の背景にある宗教的な教化の意味や藩王の支配力に関する研究資料として提供しようとするものである。

The annual *Rāmlīlā* - 'Rama's play' - of Ramnagar is known as the grandest of the open-air religious plays in North India. Ramnagar is on the eastern bank of the Ganges opposite to Banaras, and this play is performed under the patronage of the Maharaja of Banaras. The performance extends over one month immersed in religious zeal, and during this period the deities of the Ramayana are considered to stay in Ramnagar, reproducing their holy play. The whole city is transformed into a theater which represents the divine universe, and the five boys who play the roles of the deities are regarded as actual incarnations of the god Vishnu.

This paper first describes the details of the play, in particular how it is produced and performed, and how the actors, staff, audience and patron take part in it. I then present research materials on the theatrical setting of the play and its religious symbolism, and the significance of the play for the ruler and his subjects.

*日本学術振興会特別研究員

Key Words : Ramayana, Ramcharitmanas, Ramnagar, Ramlila
キーワード：ラーマーヤナ，ラームチャリットマーナス，ラームナガル，ラーム・リーラー

1　序
2　宗教劇ラーム・リーラーの歴史
3　芝居のあらすじ
4　祭の期間
5　祭のプログラム
6　劇の舞台
7　藩王の観劇
8　劇の出演者
9　ヴァースの役割
10　ラーマーヤニーによる『ラームチャリットマーナス』の朗誦
11　張子人形
12　劇終了時の献火
13　藩王の城での別れの儀式
14　ラームナガルのラーム・リーラーの特色とその意義
15　結語

1　序

インド最大のヒンドゥー教の聖地バナーラスからガンジス川を渡った対岸に，ラームナガルという町がある。叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公で神話の英雄ラーマの名を冠するこの町[1)]は，18世紀中ごろからカーシー（バナーラスの古名）藩王（マハーラージャー）の領地で，ガンジス川を臨む場所には今も美しい宮殿（写真1）が残っている。ラームナガルは毎年9月から10月ごろに1ヶ月間繰り広げられる藩王主催のラーム・リーラーで知られ，これを見物するために毎夕バナーラスの町からガンジス川を渡って多くの人々が訪れる。ラーム・リーラーの「リーラー」とは文字通りは「神の遊戯（ゆげ）」の意味であり，ラーマ神の物語を誰もが理解し楽しめるように芝居に仕立てて見せるものである。この祭はインド各地で開催されているが，この町のラーム・リーラーの特色のひとつは，藩王主催の祭であるという点である。藩王国の制度はインド独立とともに消滅しているが，カーシー藩王の血統は今も続いており，長男が代々カーシー藩王の称号を継承し，現在もラームナガルの宮殿ではバラモン達が藩王に仕えて働いている。しかし，宮廷祭官は名誉な役目であるが，財政難のために支払われる給料が低いことから，今日ではそれを希望するバラモンは少ないという。こうした現実的な問題を抱えながらも，1年に1度藩王のかつての権力をしのばせる華やかなラーム・リーラーの祭が開催され，カーシー藩王は祭の主催者として町の人々に尊敬されている。

ラームナガルのラーム・リーラーはその規模と華麗さで他の町のものとは明らかに異なる。劇の舞台はひとつではなく，町全体が巨大な劇場となり，場面が変わるごとに移動しながら町の各所に設けられた舞台で劇が繰り広げられるのである。観客は，舞台が移動すると神々とともに歩いて移動し，ラーマがアヨーディヤーの都を追放さ

写真1　ラームナガルにあるカーシー藩王の宮殿（撮影 長崎広子）

れると，都の住民となって後を追って悲しみ，魔王ラーヴァナを倒す場面ではその勝利を喜ぶ。ラーマがアヨーディヤーに帰還して王位に就くと興奮は頂点に達し，人々の万歳の声が地響きのようにラームナガルの町を包みこむさまは，芝居という域を超えてラーマ信仰の熱狂的な世界とよぶにふさわしい。

本稿では筆者が現地調査をして集めた資料と聞き取り調査の内容を中心に，ラームナガルのラーム・リーラーの祭の詳細を紹介する。なお，この祭にみられる劇の空間や時間の問題，出演者の選抜の方法，藩王の関与は他の祭にみられない独特のものであるが，古いヒンディー語による芝居のため，これまで日本で紹介されることはほとんどなかった。また，祭の背景にある宗教的な意味は北インドを中心とする今日のヴィシュヌ派ラーマ信仰との関係でも重要な事例が含まれている。これらの点をふまえながら，本稿を研究資料として提供する。

2　宗教劇ラーム・リーラーの歴史

ラーム・リーラーがいつ頃行われるようになったのか，詳細は明らかではないが，叙事詩『ラーマーヤナ』を中世ヒンディー語のアヴァディー方言に翻案して『ラームチャリットマーナス』*Rāmacaritamānasa* を著わした聖者トゥルシーダース Tulasīdāsa

（1532-1623）が広く民衆にラーマ物語を伝えるために芝居に仕立てて見せたのがそのおこりとされている。トゥルシーダースの始めたとされるラーム・リーラーはバナーラスのアッシーという場所で現在も地元住民によって受け継がれている。

ラームナガルで開催されるラーム・リーラーの起源には諸説がある。一説には，トゥルシーダースの弟子の一人メーガー・バガトが夢枕でバラタとラーマの再会の場面を芝居にするようにと神に告げられ，バナーラスにあるナーティー・イムリーという町で芝居を行い，これを見て感銘を受けたカーシー藩王が自分の宮殿のあるラームナガルでラーム・リーラーを始めたといわれている。

別の説によれば，カーシー藩王であったウディット・ナーラーヤン・シン王（1796?-1835）はバナーラスのラーム・リーラーに通っていたが，ガンジス川の氾濫で行くことができなかった時にラームナガルの近くのチョーター・ミルザープル村で劇を開催させ，それがラームナガルのラーム・リーラーになったという。さらに別の説によれば，王はチョーター・ミルザープル村で行われていたラーム・リーラーの見物に通っていた。王子が重い病気になった時，ラーマ役がかけていた花環をもらって王子にかけると病が治ったため，それ以来王の宮殿のあるラームナガルでラーム・リーラーを開催させることにしたという。いずれの伝承でも，ウディット・ナーラーヤン・シン王が最初にラーム・リーラーを催させた藩王とされている。なお，外国人で最初にこの町のラーム・リーラーについて記したのは，ジェームス・プリンセプで，彼の本に描かれた絵をみると，1820年ごろには現在の形が完成しており，今よりもはるかに華やかな祭であったことが確認される（Prinsep 1833）。

表 1　ラーム・リーラーを開催させた歴代のカーシー藩王[2)]

ウディット・ナーラーヤン・シン（1796?-1835）
イーシュヴァリー・プラサード・ナーラーヤン・シン・バハードゥル（1835-1889）
プラブ・ナーラーヤン・シン・バハードゥル（1889-1931）
アーディトヤ・ナーラーヤン・シン・バハードゥル（1931-1939）
ヴィブーティ・ナーラーヤン・シン（1939?-2000）
アナント・ナーラーヤン・シン（2000-）

なお，筆者は先王ヴィブーディ・ナーラーヤン・シン王の時代に1997年と98年の2回ラーム・リーラーを観劇し，本稿はその時の記録に基づいている。

3　芝居のあらすじ

ラーマ物語といえば，古くはヴァールミーキ作の叙事詩『ラーマーヤナ』に代表されるサンスクリットの作品が有名であるが，インド各地にはそれぞれの地方語によるラーマ物語が描かれている。中でも，16世紀にヒンディー語のアヴァディー方言に翻案されたトゥルシーダース作『ラームチャリットマーナス』は，今日北インドで最も親しまれているラーマ物語である[3)]。ラームナガルのラーマ劇も，このトゥルシーダースの作品をもとに作られたものである。

劇は，『ラームチャリットマーナス』の朗誦とサンヴァード（台詞のやりとり）で構成されている。散文で描かれた台詞の台本[4)] はイーシュヴァリー・プラサード・ナーラーヤン・シン王の時代に描かれたもので，トゥルシーダースの用いたアヴァディー方言ではなく現代ヒンディー語の基礎となったカリー・ボーリーである（Kapur 1990: 6）。

芝居のあらすじ

トレーター時代，魔王ラーヴァナは苦行によって神々から殺されることがないという力を身につけ，神々の聖なる儀式を妨げていたため，ヴィシュヌ神が人間界におりてラーマとして生まれ，ラーヴァナを倒すことになる。

アヨーディヤーを都とするコーサラ国のダシャラタ王には後継ぎがいなかったため，王は宮廷祭官である聖者ヴァシシュタに馬の犠牲祭を催させる。カウサリヤー王妃からラーマ，カイケーイー王妃からバラタ，スミトラー王妃から双子のラクシュマナとシャトルグナが生まれる。4人の兄弟は学問，武芸に優れていた。ある日，聖者ヴィシュヴァーミトラがダシャラタ王をたずね，森で乱暴をはたらくターラカーという魔女を退治するためにラーマを同伴することを依頼する。ラーマと弟のラクシュマナは聖者ヴィシュヴァーミトラに連れられ，魔女ターラカーを退治する。その後ミティラー国の都ジャナクプルでジャナカ王の娘シーターの婿選び式が開催され，ラーマは誰も持ち上げることすらできないシヴァ神の聖なる弓を折ってシーターを妻とする。アヨーディヤーの町からダシャラタ王をはじめとする花婿行列がジャナクプルを訪れ，ラーマとシーター，ラーマの弟たちの結婚式が盛大に執り行われ，一行はアヨーディヤーに帰還する。

老齢になったダシャラタ王はラーマに王位を譲ることを決めるが，即位式の前夜，

侍女マンタラーにそそのかされたカイケーイー王妃はダシャラタ王がかねて語った二つの願い事をかなえるという約束の履行をせまり，ラーマを14年間森に追放することと，息子バラタを王位につけることを要求する。

悩むダシャラタ王にラーマは誓いを果たすことが王としての責務だと諭して，妻シーターと弟ラクシュマナとともに自ら森へ出発する。ラーマ一行は途中ニシャーダ王グハに出会い歓待を受け，ガンジス川を渡って聖地プラヤーガで聖者バラドヴァージャの庵を訪れる。聖者のすすめでヤムナー川を渡って聖地チットラクートに暮らすことになる。

一方ダシャラタ王はラーマを失った悲しみによって亡くなり，母の実家にいたバラタが呼び戻される。バラタは母カイケーイー妃の犯した罪を責め，ラーマを迎えにチットラクートに出向く。

ラーマとバラタ兄弟は再会するが，ラーマはアヨーディヤーに戻って即位するようにというバラタの要請を断り，14年後の再会を約束して別れる。バラタはラーマのサンダルを持ち帰り，玉座にそれを置いて自身は摂政となってナンディグラームという村で兄ラーマをしのびつつ苦行の生活をいとなんだ。

ラーマ，シーター，ラクシュマナはチットラクートを離れパンチャヴァティーの森で暮らしはじめる。魔王ラーヴァナの妹シュールパナカーが美しい王子ラーマに恋心を抱き，恋敵のシーターに襲いかかったため，ラクシュマナによって鼻と耳をそぎ落とされる。復讐にきた悪魔たちをラーマは追い払うが，妻シーターの身の危険を予期して彼女の本当の姿を火の中に隠し，幻のシーターを取り出しておく。魔法の金の鹿に誘われてラーマとラクシュマナが小屋を離れたすきに，ラーヴァナはシーターを誘拐する。これを見た禿鷲の王ジャターユはラーヴァナと戦うが，重症を負い，シーターがラーヴァナにさらわれたことをラーマとラクシュマナに告げて息を引き取る。ラーマとラクシュマナはシーターを探してキシュキンダーの町に到着し，猿のハヌマーンとスグリーヴァに出会い同盟を結んで猿王ヴァーリンを倒す。ハヌマーンはシーターを海の向こうのラーヴァナの都ランカーで発見する。ラーマ軍はラーメーシュヴァルから海に橋をかけてランカーへ攻め込む。ラーヴァナの息子メーガナーダの魔法の弓矢でラクシュマナは瀕死の重傷を負うが，ハヌマーンがヒマラヤから薬草を運び一命をとりとめる。激戦の末ラーマ軍は勝利をおさめ，シーターを奪回する。ラーマは火神アグニに託した本当のシーターを取り戻す。一行はアヨーディヤーに凱旋し，バラタとシャトルグナは一行を迎え，4人の兄弟は14年ぶりの再会を喜ぶ。アヨーディヤーの都で盛大にラーマの即位式が執り行われる。

なお，劇は大筋としては『ラームチャリットマーナス』に従っているが，シーターがラーヴァナに誘拐される前に火神アグニに預けられ，ラーヴァナがさらったシーターは幻であったとされているのは，『アディヤートマ・ラーマーヤナ』*Adihiyātomarāmāyaṇa* に近いが，この劇固有のストーリー展開である。一般のラーマ物語では，ラーヴァナを倒してシーターを奪回したラーマはラーヴァナの邪心をもった目にさらされた妻を受け入れることはできないという。嘆いたシーターは自ら火に焼かれ，ここで火神アグニが登場して彼女の身の潔白を証明する。この劇のストーリーも彼女の身の潔白に重点が置かれているが，火にシーターを隠す時にラーマは「これから人間の遊戯（リーラー）を行う」という。つまり，その後のシーターの誘拐からラーヴァナ征伐に発展する一連の出来事はヴィシュヌ神の化身ラーマが人間の遊戯を楽しむために必要な展開であり，ここに「ラーマ神の遊戯」ラーム・リーラーの趣旨がうかがえるのである。

4　祭の期間

月の満ち欠けにもとづいた伝統的なインド暦に従って，ラーム・リーラーはバードラ月の白分（月が満ちていく期間）第14日に始まり，アーシュヴィン月の黒分（月の欠ける期間）と白分の1ヶ月間にわたって続く。そのため，太陽暦では毎年開催される日が異なることになる。ちなみに過去5年間のリーラーの開始日は，1997年9月15日，1998年9月5日，1999年9月24日，2000年9月12日，2001年10月1日である。これは，ラーマが誕生する祭の第2日と祭の最終日が満月になるようにプログラムが組まれるためである。

準備は約2ヶ月前から始まり，後述のようにラーマ，シーター，バラタ，ラクシュマナ，シャトルグナの5人のスヴァループ（神の化身）を演じる男子が選ばれる。配役が決まると，シュラーヴァナ月黒分第4日にガネーシャ神のプージャー（礼拝）が行われ，劇で使用される王冠，台本，仮面にくわえて劇の道具を作る金槌なども礼拝される。スヴァループの5人は額にティラクの印をつけられ，花環をかけられる。この後，役者は芝居の稽古を始め，大道具や小道具の担当の者は仕事を始める。バードラ月の黒分第4日に2回目のガネーシャ神の礼拝があり，祭をとりしきるアディカーリー（責任者）が王と人々の幸福を祈り，ラーマ神への帰依を宣言する。この日からラーマーヤニー（『ラームチャリットマーナス』の朗誦役）は『ラームチャリットマーナス』の朗誦を始める。

5　祭のプログラム

祭に際して毎年城で配布される日程表（図1）がある。このプログラムには，劇の開始の日や毎日演じられる内容がヒンディー語で記されている。年によって日程と芝居の内容が若干異なるが，一例として31日間で組まれた1998年のプログラムを日本語に翻訳して以下に挙げる。

表 2　ラームナガルのラーム・リーラー　1998年の日程表

第 1 日	バードラ月白分14日	ラーヴァナの誕生，世界征服，乳海，神々の讃歌，天の声
第 2 日	バードラ月白分15日	アヨーディヤーでシュリンギー聖仙の供儀，奇跡の顕現，ラーマ達の誕生，ヴィシュヌ神の顕現，子供時代，聖紐の儀式，狩
第 3 日	アーシュヴィン月黒分1日	聖者ヴィシュヴァーミトラの訪問，ターラカーとスバーフの殺戮，マーリーチャ征伐，アヒルヤーの救済，ガンジス川，ミティラー国入り，ジャナカ王との会見
第 4 日	アーシュヴィン月黒分2日	ジャナクプル，8人の娘の会話，花園
第 5 日	アーシュヴィン月黒分3日	弓の供儀，パラシュラーマとの会話
第 6 日	アーシュヴィン月黒分4/5日	アヨーディヤーから花婿行列出発，ジャナクプルで結婚式
第 7 日	アーシュヴィン月黒分6日	ジャナクプルから結婚式の一団出発，アヨーディヤーで新婚夫婦を迎える献火，就寝
第 8 日	アーシュヴィン月黒分7日	戴冠式の準備，後宮の怒りの部屋
第 9 日	アーシュヴィン月黒分8日	森に到着，ニシャーダに出会う，ラクシュマナによるギーターの教え
第10日	アーシュヴィン月黒分9日	ガンジス川を渡る，聖者バラドヴァージャの庵に到着，ヤムナー川を渡る，村人に出会う，聖者ヴァールミーキの庵，チットラクートでの暮らし，スマントラがアヨーディヤーへ帰還，ダシャラタ王の死
第11日	アーシュヴィン月黒10日	バラタがアヨーディヤーに帰る，会議，バラタはチットラクートへ向かう，ニシャーダに出会う，ガンジス川を渡る，聖者バラドヴァージャの庵に滞在
第12日	アーシュヴィン月黒分11日	バラタはヤムナー川を渡る，村人に出会う，ラーマとの再会

第13日	アーシュヴィン月黒分12日	聖者ヴァシシュタの会議，ジャナカ王到着，ジャナカ王の会議
第14日	アーシュヴィン月黒分13日	バラタがチットラクートを出発，アヨーディヤーに到着，ナンディグラームに住む
第15日	アーシュヴィン月黒分14日	烏ジャヤンタの目を射抜く，聖者アトリに出会う，ヴィラーダを殺害，インドラ神に出会う，シュラバンガ－スティクシャナ－聖者アガスティヤ－禿鷲の王の到着，パンチャヴァティーでの暮らし，ギーターの教え
第16日	アーシュヴィン月黒分30日	シュールパナカーの鼻を切り落とす，カラとドゥーシャナを殺害，シーター誘拐，ラーヴァナと禿鷲の王の戦い
第17日	アーシュヴィン月黒分1日	シーターをさらわれて嘆くラーマ，ジャターユの葬儀，シャヴァリーの果物を食べる，森の説明，パンパー湖へ出発，ナーラダ，ハヌマーン，スグリーヴァとの出会い
第18日	アーシュヴィン月白分2日	ヴァーリンを殺害，雨季の説明，ハヌマーンはランカーへ出発，サンパーティとの出会い
第19日	アーシュヴィン月白分3日	ハヌマーン海を渡る，シーター発見，ランカーを焼く，主ラーマのもとに帰還，報告
第20日	アーシュヴィン月白分4日	軍隊をひきつれラーマは海へ向かう，ヴィビーシャナとの出会い，橋の建設，シヴァ神像の安置
第21日	アーシュヴィン月白分5日	ラーマ軍海を渡る，軍隊の説明，スヴェールの山で休息，アンガダ
第22日	アーシュヴィン月白分5/6日	四つの門での戦い，ラクシュマナが武器シャクティによって負傷，反撃
第23日	アーシュヴィン月白分6/7日	クンバカルナとの戦い，殺害，メーガナーダとの戦い，ヘビの弓，苦行，殺害
第24日	アーシュヴィン月白分7/8日	ラーヴァナとの戦い
第25日	アーシュヴィン月白分8/9日	ラーヴァナとの戦い，戦場
第26日	アーシュヴィン月白分9/10日	ラーヴァナ死す，ラーマの勝利
第27日	アーシュヴィン月白分10/11日	ヴィビーシャナの戴冠，シーターと再会，神々による礼賛
第28日	アーシュヴィン月白分11/12日	ラーマはアヨーディヤーへ出発，ニシャーダの庵に滞在
第29日	アーシュヴィン月白分12/13日	ラーマとバラタの再会
第30日	アーシュヴィン月白分14日	ラーマの戴冠式

第31日	アーシュヴィン月白分15日	庭の散歩，サナカ達と出会う，魂の教え，城での別れ

注意事項　劇は夕方の5時から9時まで行われる。バラタとラーマの再会は9時から12時まで。ラーマの戴冠は朝5時から早朝まで。雨などのやむをえない理由によって開催できない場合は2日分まとめて行われる。許可のない写真撮影と録音は禁止[5)]。

6　劇の舞台

ラームナガルのラーム・リーラーの特色のひとつは，約3キロ四方のかつての藩王の領地をラーマ物語の舞台に見立てて場所を移動しながら芝居が繰り広げられる点である。これらの舞台はラーム・リーラー・グラウンドとよばれる。ラーム・リーラー・グラウンドは藩王の城を中心に配置されているため，必ずしも実際の位置関係を反映しているわけではない。しかし，藩王の城のそばにラーマの都アヨーディヤーがあり，アヨーディヤーからみてラーヴァナの都ランカー（現在のスリランカ）が南で最も離れているように配置されている（図2）。また，ダシャラタ王の都アヨーディヤーやジャナカ王の都ジャナクプルに比べると，ラーマが追放されて訪れた森チットラクートやパンチャヴァティーは地面が舗装されていない空地で，物語に描かれている雰囲気に近い場所が選ばれていることが分かる。ちなみにラーム・リーラー・グラウンドは普段も劇の舞台の名でよばれている。

主要な舞台

ラームバーグ：「ラーマの庭」の意味で，広場には大理石のバルコニーや塔がある。劇の第1日にラーヴァナは苦行で魔力を獲得し，ヴィシュヌ神がラーヴァナを退治するために人間となって生まれる場面が繰り広げられる。この北にあるドゥルガー寺院のポークラー池はヴィシュヌ神がアナンタ竜王の上に横たわって漂う乳海になる。最終日にはラーマが大理石の塔で神への帰依を教える。

アヨーディヤー：ダシャラタ王の都で，ラーマの生誕地である。藩王の城から100メートル離れた小さな広場。中央奥に約3メートルの高さの壇があり，主としてラーマとその一族が座る。別にシュリンギー聖仙の供儀の場所，聖者ヴァシシュタの庵が作られる。観客は地面に座ったり，両脇の壁によじのぼったりして劇を見物する。

ジャナクプル：ジャナカ王の都でシーターの生まれ故郷。藩王の城から北に向けて通る目抜き通りを東西にはさんだ一帯。弟ラクシュマナと聖者ヴィシュヴァーミトラとともにシーターの婿選び式に参加したラーマはシヴァ神の神聖な弓を折り，シー

卐 श्रीलीलाधराय नमः 卐

मायाकृत बहु जवनिका नाट्यशाल जग भ्राज । आपु करैं आपुहिं लखैं, बन्दौं ते नटराज ॥

अथ लीलानुकरणं प्रवक्ष्यामि महामुने ।
यत्कृत्वा चाथ दृष्ट्वा हि मुच्यते पातकैर्नरः ।

रामचरित राकेश-कर सरिस सुखद सब काहु ।
सज्जनकुमुद-चकोर चित हित विशेष बड़ लाहु ॥

सूचीपत्र :–श्रीरामलीला रामनगर, काशी, आ० सं० २०५५ बि० मानस सं० ४२५

संख्या	मास	तिथि	वार	ता०अ० महीना	लीला विवरण १९९८
१	भा०शु०	१४	शनि	सित.५	रावण का जन्म दिग्विजय, क्षीर सागर की झांकी, देवस्तुति, आकाश वाणी
२	भा०शु०	१५	रवि	६	श्रीअवध में शृङ्गीऋषिकृत यज्ञ,अदभुतझाँकी,श्रीरामजी आदि का जन्म,विराट-दर्शन,बाललीला,यज्ञोपवीत मृगया ।
३	आ०कृ०	१	चन्द्र	७	विश्वामित्र-आगमन,ताड़का-सुबाहु-वध,मारीच-निरसन,अहिल्या-तारण,गंगा-दर्शन,मिथिला-प्रवेश श्रीजनक-मिलन ।
४	आ० ,,	२	भौम	८	श्री जनकपुर दर्शन, अष्ट सखी-संवाद' फुलवारी ।
५	आ० ,,	३	बुध	९	धनुष-यज्ञ, परशुराम - संवाद ।
६	आ० ,,	४/५	गुरु	१०	श्री अवध से बारात का प्रस्थान, जनकपुर में विवाह ।
७	आ० ,,	६	शुक्र	११	जनकपुर से बारात की विदाई, अवध में परिछन तथा शयन की झाँकी ।
८	आ० ,,	७	शनि	१२	राज्याभिषेक - सभारम्भ, कोपभवन ।
९	आ० ,,	८	रवि	१३	वन-गमन, निषाद-मिलन, श्री लक्ष्मणकृत गीता उपदेश ।
१०	आ० ,,	९	चन्द्र	१४	गङ्गावतरण, भारद्वाज समागम, यमुना - वतरण, ग्रामवासी मिलन, बाल्मीकि समागम, चिकूत्रट निवास, सुमन्त का अयोध्यागमन, श्री दशरथ ……।
११	आ० ,,	१०	भौम	१५	श्री अवध में भरतागमन,सभा, श्रीभरत का चित्रकूट-प्रयाण, निषाद मिलन,गंगावतरण, भारद्वाज आश्रम निवास ।
१२	आ० ,,	११	बुध	१६	भरत का यमुना वतरण, ग्रामवासी मिलन, श्री रामचन्द्र दर्शन ।
१३	आ० ,,	१२	गुरु	१७	वशिष्ठ सभा, श्री चित्रकूट में जनकागमन तथा सभा ।
१४	आ० ,,	१३	शुक्र	१८	भरत जी का चित्रकूट से विदा होकर अयोध्यागमन, नन्दी ग्राम निवास ।
१५	आ० ,,	१४	शनि	१९	जयन्त नेत्र-भंग अत्रि-मुनि-मिलन, विराध-वध, इन्द्र दर्शन, शरभंग सुतीक्षण – अगस्त्य गृद्धराज समागम, पंचवटी में निवास, गीता उपदेश ।
१६	आ० ,,	३०	रवि	२०	शूर्पणखा–नासिका छेदन, खरदूषण-वध, श्री जानकी हरण, रावण गृद्धराज-युद्ध ।
१७	आ०शु०	१	चन्द्र	२१	श्रीजानकी वियोग में श्रीरामकृत विलाप व जटायु की अन्त्येष्टि, शवरी-फल भोजन, वन वर्णन, पंपासर पर्यटन, नारद, हनुमान, सुग्रीव-मिलन ।
१८	आ० ,,	२	भौम	२२	बालि-वध, वर्षा-वर्णन, हनुमान का लंका प्रस्थान, संपाती-मिलन ।
१९	आ० ,,	३	बुध	२३	हनुमान का सिन्धु पार-गमन, श्रीजानकी-दर्शन, लंका-दहन, पुनः श्री पदाम्बुज-समागम, समाचार निवेदन ।
२०	आ० ,,	४	गुरु	२४	श्री रघुबर का सेना सहित सिन्धु तट प्रयाण, विभिषण-मिलन, सेतु-निर्माण, शिव-स्थापना ।
२१	आ० ,,	५	शुक्र	२५	श्री रामजी का सेना सहित सिन्धु पार होना, सेना वर्णन, सुबेलगिरि विश्राम, अंगद विस्तार ।
२२	आ० ,,	५ ६	शनि	२६	चारो फाटक की लड़ाई, लक्ष्मण पर शक्ति प्रयोग तथा प्रतिकार ।
२३	आ० ,,	६/७	रवि	२७	कुम्भकर्ण युद्ध और वध, मेघनाद-युद्ध, नाग-फाँस तथा यज्ञ और वध ।
२४	आ० ,,	७/८	चन्द्र	२८	रावण - युद्ध ।
२५	आ० ,,	८/९	भौम	२९	रावण - युद्ध और रणभूमि अवलोकन ।
२६	आ० ,,	९/१०	बुध	३०	रावण का रणक्षेत्र में मृत्यु शय्या पर शयन, श्रीराम विजय ।
२७	आ० ,,	१०/११	गुरु	अक्टू.१	विभिषण का राजतिलक, श्रीजानकी-मिलन, देवस्तुति
२८	आ० ,,	११/१२	शुक्र	२	श्रीराम का अवध प्रयाण, निषादाश्रम निवास ।
२९	आ० ,,	१२/१३	शनि	३	श्रीराम - भरत मिलाप
३०	आ० ,,	१४	रवि	४	श्रीराम - राज्याभिषेक ।
३१	आ० ,,	१५	चन्द्र	५	श्रीराम उपवन-विहार, सनकादिक-मिलन, पुरजनोपदेश ।

सूचना–लीला का समय प्रतिदिन सायं ५ बजे से ९ बजे रात्रि तक है । केवल भरत मिलाप ९ बजे रात्रि से १२ बजे रात्रि के भीतर होगा । श्री रामराज्य की झाँकी संध्या ५ बजे से प्रातःकाल तक रहेगी । प्रायः वर्षा आदि विशेष कारणों से जो लीला किसी दिन नहीं हो सकेगी वह एक या दो दिन के भीतर पूरी कर दी जायेगी । लीला के समय चित्र एवं टेपरिकार्ड बिना आज्ञा लेना निषिद्ध है ।

वंश बहादुरर सिंह
मन्त्री श्री रामलीला
सर्व भारतीय काशीराज न्यास, दुर्ग रामनगर, काशी

मुद्रक :–मधुसूदन प्रेस, भदैनी, वाराणसी

図1 ラームナガルのラーム・リーラー 1998年の日程表

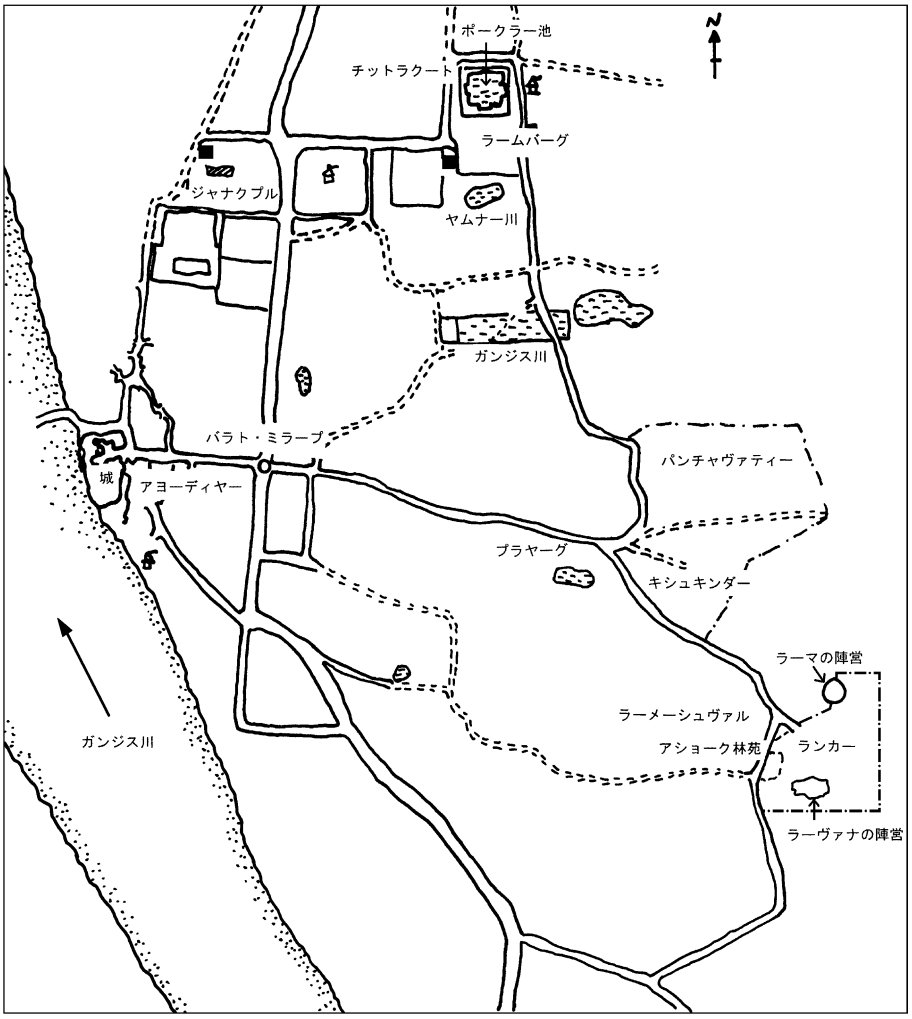


図 2　ラームナガル概略図[6)]

ターと結婚する。通りの東にはシーターとラーマが出会って恋に落ちる花園があり，色とりどりの鳥が飾られる。ここにはギリジャー（パールヴァティー女神）の寺がある。通りをはさんで西の広場にはシーターの父ジャナカ王の宮殿，婿選びの弓の儀式が行われる壇，ラーマ，ラクシュマナ，ヴィシュヴァーミトラのための壇，ラーマとシーターの結婚式が行われるジャナカ王の住居の壇が作られる。

チットラクート：アヨーディヤーから追放されたラーマ，シーター，ラクシュマナが暮らした山。ラーマを迎えに来たバラタはここでラーマと再会する。ラームバーグの北西に位置するドゥルガー寺院とポークラー池に隣接した広場の奥に，土で作られた壇の上にテントが張られ，ラーマの小屋に見立てられる。ラーマを迎えに来たバラタ一行は，アヨーディヤー寄りの広場の入り口近くに別にテントが張られた場所で演技する。他にインドラ神の山車が出る。バラタとその一行は広場の中を円を描いて5回まわり，観客もこれに従って一緒に歩くが，これはバラタがチットラクートを5日かけて巡礼した[7]ことをあらわしている。パンチャヴァティーに向かうラーマ一行はポークラー池の周りを歩き，途中数人の聖者に会う。

パンチャヴァティー（写真2）：ラーマ，シーター，ラクシュマナが暮らしたとされるダンダカの森。城の東に位置する広場には地名パンチャヴァティー（5本の木）にちなんで，マンゴー，イチジク，菩提樹，ピーパル（インドボダイジュ），ニーム（インドセンダン）の5本の木が植えられている。ラクシュマナがラーヴァナの妹シュールパナカーの鼻を切り落とし，ラーヴァナはシーターを誘拐する。ラーヴァナと禿鷲ジャターユの戦いが繰り広げられ，敗れたジャターユはラーマによって火葬される。

パンパー湖：ラーマとラクシュマナがシーターを捜し求めて訪れる湖。ハヌマーンやスグリーヴァと出会い，ラーマは猿王ヴァーリンを倒す。ビーティー村の北にある池。

ラーメーシュヴァルからランカーの間の海は水の張っていない人工池が使われ，池にかけられた板を渡ることで海を越えたことを表す。

ランカー（写真3）：魔王ラーヴァナの都。藩王の城の南東に位置する。劇の舞台の中では最も大きな広場で，シーターが囚われたアショーク林苑，ラーヴァナの陣営，ラーマの陣営（スヴェール山）がそれぞれ離れた場所にあり，ラーマとラーヴァナの戦闘は中央で繰り広げられる。ここでは巨大な張子人形が多く出て，迫力のある戦闘の場面が演出される。

普段はチョークとよばれる交差点は劇ではバラト・ミラープ（ラーマとバラタの再会）の舞台となり，ラーヴァナを倒して凱旋するラーマをバラタがここで迎える。

写真 2　祭の舞台パンチャヴァティー（撮影 長崎広子）

写真 3　祭の舞台ランカー（撮影 横地優子）

表 3　日程と舞台の場所

第 1 日	ラームバーグ，ポークラー 湖
第 2 日	アヨーディヤー
第 3 日	アヨーディヤーからジャナクプル
第 4 日	ジャナクプル
第 5 日	ジャナクプル
第 6 日	アヨーディヤーからジャナクプル
第 7 日	ジャナクプルからアヨーディヤー
第 8 日	アヨーディヤー
第 9 日	アヨーディヤーからニシャーダ庵
第10日	ニシャーダ庵からチットラクート，アヨーディヤー
第11日	アヨーディヤー，バラドヴァージャ庵
第12日	バラドヴァージャ庵，チットラクート
第13日	チットラクート
第14日	チットラクートからアヨーディヤー
第15日	チットラクートからパンチャヴァティー
第16日	パンチャヴァティー
第17日	パンチャヴァティー，パンパー湖
第18日	パンパー湖，ラーメーシュヴァル
第19日	ラーメーシュヴァル，ランカー，パンパー湖
第20日	パンパー湖からラーメーシュヴァル
第21日	ラーメーシュヴァル，スヴェール山
第22日	ランカー
第23日	ランカー
第24日	ランカー
第25日	ランカー
第26日	ランカー
第27日	ランカー
第28日	ランカー，ニシャーダ庵
第29日	ニシャーダ庵，バラト・ミラープ
第30日	アヨーディヤー
第31日	アヨーディヤー，ラームバーグ，城

7　藩王の観劇

祭のパトロンである藩王とその家族はきらびやかな衣装をまとい，毎夕5時になると馬車や象に乗って舞台に現れ，祭を見物する（写真4）。観客はシヴァ神の化身である藩王を「ハラ・ハラ・マハーデーオ（シヴァ神よ，大王よ）」と喚起の声をあげて迎える。舞台が城から遠い場合は，二頭立ての馬車に乗り，到着すると象に乗り換える。藩王の到着をまって劇は始まる。老齢の藩王は体調によっては車で来て，その中から見物する場合もある。

劇は夕方5時に始まり，7時ごろに途中休憩がはさまるが，その間藩王は家族やバラモン僧とともに城に戻って礼拝を行う。藩王はサンディヤーの礼拝を早朝，昼，夕方の3回行っており[8)]，劇の途中休憩に行われる礼拝は夕方の礼拝である。スヴァループ（神の化身）はこの間冠をはずして休憩する。観客はスヴァループに近づき祝福を受けたり，屋台でお菓子や嗜好品のパーン（キンマの葉）を買い求めたりする。苦行者たちはキールタン（讃歌の合唱）を行い，「シーター・ラーム」や「ジャイ・シヤラーム（ラーマ・シーターに勝利あれ）」を繰り返し，中には踊りだす者もいる（写真5）。この休憩はおよそ1時間で，藩王が戻ると再び劇が始まる。

毎日藩王は劇の見物に訪れるが，例外として観劇しないことがある。ひとつは，ダシャラタ王が王妃カイケーイーによってラーマの追放とバラタの即位を要求される場面で，王妃に約束の履行をせまられたダシャラタ王が感情をあらわに泣く姿を見たくはないのだという。また，シーターが魔王ラーヴァナによってさらわれる場面も，王妃の誘拐に立ち会いたくないということで劇場を去る。さらに，祭のクライマックスであるラーマがラーヴァナを倒すダシャーラーの日には，劇場には姿を現すけれども，劇自体は見物せずに早々に立ち去る。これは，同じ王として魔王ラーヴァナの死を見るにはしのびないという理由による。だが，これらは必ずしも決まりということではなく，歴代の王の中には芝居を観劇していた者もいたという（Schechner 1985: 193）。

なお，1度だけ藩王自らが劇の中に入る場面がある。これは，ラーマが14年間の追放を終えてアヨーディヤーに戻りバラタと再会する場面であるが，全てのスヴァループがそろったところで藩王は象の輿を降りてスヴァループに歩み寄り，足元に額づいて礼をし，祝福を受ける。祭のパトロンである藩王がスヴァループを神の化身として拝むと，観客は「勝利あれ」と歓声を上げてスヴァループと藩王を称える。

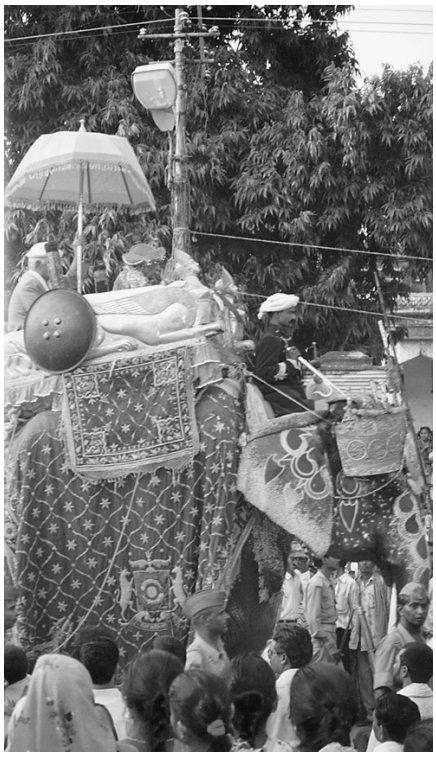


写真 4　カーシー藩王ヴィブーティ・ナーラーヤン・シン（撮影 長崎広子）

写真 5　キールタン（讃歌の合唱）を行う苦行者（撮影 長崎広子）

8　劇の出演者

出演者は全員ラームナガルと近郊の町に住む素人の役者で，祭の最終日に藩王から労をねぎらう意味で小額のお布施をもらうが，出演料はなく，基本的にはボランティアである。

劇の配役は主役といえるスヴァループ（神の化身）の役とそれ以外の役に大別される。ラーマとその弟バラタ，ラクシュマナ，シャトルグナにラーマの妻シーターをくわえた5人の役はスヴァループとよばれ，藩王を筆頭とする委員会でバラモンの子弟の中から毎年選ばれる。祭の期間中スヴァループを演じる5人は，文字通り神の化身として扱われ，礼拝の対象となる重要な役である。演じる少年は8歳から15歳の年齢で，何度も同じ役を演じることがある。また，ラーマの弟を演じた者が翌年にはその兄の役を演じ，また次の年にはその兄を演じて最後はラーマを演じるということもある。なお，スヴァループとなる条件は容姿と声で，声変わりしていない少年が選ばれ，ヒゲが生えたり，声変わりすると，スヴァループを演じることはできない。舞台ではマイクを使用しないが，高いスヴァループの声は遠い場所に座る観客でもはっきり聞きとることができる。準備期間を含めた祭の期間中，5人は親元を離れて後述するヴャースという世話役とともに生活する。3ヶ月間は学校を休んで『ラームチャリットマーナス』を学び，抑揚をつけながら台詞を読む方法や動きをヴャースから習う。3ヶ月間の生活費は藩王が負担する。

表 4　主な出演者

スヴァループ	ラーマ（ヴィシュヌ神を兼ねる），シーター（ラクシュミー女神を兼ねる），バラタ，ラクシュマナ，シャトルグナ
その他（神格，聖者，王族など）	シヴァ神，ブラフマー神，インドラ神，ナーラダ仙，ダシャラタ王と王妃（カウサリヤー，カイケーイー，スミトラー） 聖者ヴァシシュタ，御者スマントラ ジャナカ王 ニシャーダ，聖者ヴィシュヴァーミトラ，スグリーヴァ，ハヌマーン，アンガダ，パラシュラーマ，聖者バラドヴァージャ，聖者ヴァールミーキ
（羅刹）	ラーヴァナ，メーガナーダ，クンバカルナ，シュールパナカー，ヴィビーシャナ

スヴァループとは異なりダシャラタ王，聖者ヴィシュヴァーミトラ，聖者ヴァシシュタなどの主要な役には大人が扮し，同じ人物が毎年演じるが，年をとるとその息子によって引き継がれる。この劇では女性の役も全て男性によって演じられる。ただし，女性の衣装を身に着けるだけで，けばけばしい化粧をしたり，声色を変えたりすることはない。

なお，出演者は一部の例外をのぞいてバラモンのカーストに属する者である。例外とは，ガンジス川に見立てられた小さな池で船をこぐ船頭役と，ラーマとラーヴァナの戦いで活躍するラーマの猿の軍隊である。船頭役は本物の船頭が演じ，猿の役は地元の子供たち（写真6）によって演じられる。

役者は化粧をして衣装を身に着けるが，スヴァループの化粧と衣装はひときわ美しく，人目を引くものである（写真7, 8, 9）。顔には色とりどりの光るスパンコールが貼り付けられ，さまざまな色で飾られる。白檀の粉が手，足，顔に塗られる。化粧が済むと装身具，花環，王冠をつけ，役柄に応じて弓矢，矢筒，蓮の花などを持つ。

羅刹のラーヴァナやハヌマーンなどの猿の役，ラーマ軍の猿や熊役は大きな面をかぶる。

写真 6　猿の役を演じる地元の子供たち（撮影 長崎広子）

写真 7　スヴァループ――向かって右からラーマ，ラクシュマナ（撮影 長崎広子）

写真 8　ラーマ役を演じる少年
（撮影 長崎広子）

写真 9　ラクシュマナ役を演じる少年
（撮影 長崎広子）

9　ヴャースの役割

ラーム・リーラーの進行役兼世話役のことをヴャースという。ヴャースとは叙事詩『マハーバーラタ』の作者とされる聖者ヴャーサの名に由来する名称である。日本の黒子とは逆に，白い上着と腰巻とターバンからなる伝統的な王室祭官の装束をまとった2人のヴャースは常に舞台上におり，劇の進行役をつとめる（写真10）。

準備期間を含めて祭の全期間中スヴァループと寝食をともにするが，1人のヴャースが5人のスヴァループを，スヴァループ以外の役はもう1人のヴャースが担当し，サンヴァード（台詞のやりとり）や動きを教える。スヴァループの化粧と着付けは本番前にヴャースとその家族で行う。

本番ではサンヴァードの前にヴャースは大きな声で「静粛に，注意。（cupa raho sāvadhāna）」と叫ぶ。すると，見物人は途端に静かになり，誰ひとり声をたてずにじっとサンヴァードに聞き入る。台本を見ながら役者のそばで台詞をささやき，役者は大きな声でそれを繰り返す。手に持つ台本には台詞のやりとり以外に化粧，衣装，お参りの手順などが記されている。

なお，2人ともかつてスヴァループを演じたことがあり，普段は僧侶で，ヴャース役は代々引き継がれる。

10　ラーマーヤニーによる『ラームチャリットマーナス』の朗誦

芝居が演じられる一方で，ラーマーヤニーとよばれる12人のバラモン達は藩王の近くに座り，オイルランプで照らされて『ラームチャリットマーナス』を朗誦する。まずラーマーヤニーが決められた場所まで朗誦し，ヴャースが観客に注意をうながすと，続いてサンヴァード（台詞のやりとり）が始まる。サンヴァードが終わるとヴャースが台本を頭上にかざして合図し，再びラーマーヤニーの朗誦が始まる。筆頭ラーマーヤニー（写真11）が他のラーマーヤニーを選ぶが，写本を読むために教師など，少なくとも中等以上の教育を受けた者が選ばれ，これは名誉な役とされる。12人以外にムリダングとよばれる胴長の両面太鼓をたたく者がいるが，この役はバラモン出身者ではない。

祭では藩王所有の写本から校訂された校訂版が朗誦される[9)]。マートラー（モーラ）の拍を単位とする韻律で編まれたこの作品はメロディーにのせて歌われることが多

写真10　祭の進行役をつとめる2人のヴャース（撮影 横地優子）

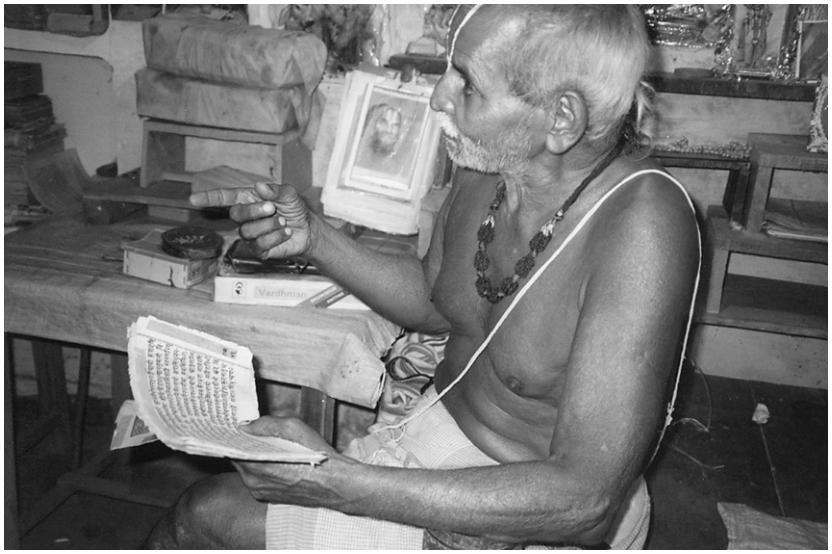


写真11　筆頭ラーマーヤニーのラームジー・パーンデーヤ氏――自宅にて（撮影 長崎広子）

写真12　『ラームチャリットマーナス』の写本（撮影 長崎広子）

いが，ラームナガルのラーム・リーラーでは祭の期間中に限られた「ナーラダ仙の声（nārada vāṇī）」という独特の節で歌われる。6人づつ2組に分かれて向かい合って座り，『ラームチャリットマーナス』の写本[10]（写真12）を真中において，4人は小さなシンバルを叩きながら朗誦する。「チャウパーイー」[11]という詩形では合いの手が入り，最初の6人が「エー」あるいは「エーハーン」，続いて次の6人が「ハーン」という掛け声をかけて，互いに歌う。

エー　suni lachimana sītā kai bānī｜
　ハーン　biraha bibeka dharmanuti sānī‖
エーハーン　locana sajala jori kara doū｜
　ハーン　prabhu suna kachu kahi sakata na oū‖
エーハーン　dekhi rāmarukha lachimanu dhāe｜
　ハーン　pāvaka pragaṭi kāṭha bahu lāe‖

なお，祭の10日前からラーマーヤニーは『ラームチャリットマーナス』の冒頭の部分の朗誦を始める。毎年祭の日程とプログラムが若干異なるが，先述の98年のプログラムではラーマーヤニーによって朗誦される『ラームチャリットマーナス』の個所は次のようになる。（章番号. 段落番号. 行番号．d: ドーハー , s: ソールター , sh: シュローカ）

バードラ月第4日　1.0-1.7.d4

バードラ月第5日　1.8.1-1.20.d1

バードラ月第6日　1.21.1-1.40.d1

バードラ月第7日　1.41.1-1.60.d1

バードラ月第8日　1.61.1-1.80.d1

バードラ月第9日　1.81.1-1.101.d1

バードラ月第10日　1.102.1-1.120.s3

バードラ月第11日　1.121.1-1.140.s1

バードラ月第12日　1.141.1-1.160.d1

バードラ月第13日　1.161.1-1.175.d1

――（祭の開始）――

第1日：1.176.1-1.188.6

第2日：1.188.7-1.206.1

第3日：1.206.2-1.217.d1

第4日：1.218.1-1.1.239.8

第5日：1.239.9-1.289.d1

第6日：1.290.1-1.327.d1

第7日：1.328.1-1.361.s1

第8日：2.0.sh1-2.58.1

第9日：2.58.2-2.94.1

第10日：2.94.2-2.158.1

第11日：2.158.2-2.214.d1

第12日：2.215.1-2.252.7

第13日：2.252.8-2.306.4

第14日：2.306.5-2.325.s1

第15日：3.0.sh1-3.17.2

第16日：3.17.3-3.30.4

第17日：3.30.5-4.7.24

第18日：4.7.25-4.30.s1

第19日：5.0.sh1-5.34.5

第20日：5.34.6-6.3.d1

第21日：6.4.1-6.38.d2

第22日：6.39.1-6.62.4

第23日：6.62.5-6.78.3

第24日：6.78.4-6.84.d1

第25日：6.85.1-6.100.6

第26日：6.100.7-6.105.d1

第27日：6.106.1-6.115.d1

第28日：6.116.1-7.0.sh3

第29日：7.0.d1-7.11.d3

第30日：7.12.1-7.31.d1

第31日：7.32.1-7.131.sh2

11　張子人形

ラームナガルのラーム・リーラーでひときわ人目を引くものが，芝居の中で登場する巨大な張子人形である。これらはイスラーム教徒の職人の一家によって約2ヶ月かけて毎年製作される。竹を細く切った紐を輪にして枠を組み，小麦粉に水をといて作った糊で紙を張ってその上に彩色をほどこす。

張子人形は主に羅刹のものが製作され，鼻や耳をそぎ落とされたり，殺される場面になると，役者が演じるのではなくて人形の手足などが次々と切り落とされる。最も大きなクンバカルナ人形（写真13）は数メートルあり，鼻や耳や手が簡単に取れるように付けられている。ラーマ軍との戦いの場面ではクンバカルナ人形の上に人がよじ登って鼻から血を流したように赤い絵の具がかけられ，耳が切り落とされ，腕もはずされる。ラーヴァナ人形はラーマを演じるスヴァループによって何度も矢で射抜かれ，ダシャーラーの日に火葬の場面で燃やされる。クンバカルナ，メーガナーダ，ターラカー，ラーヴァナといった人の姿をした人形以外に動物の張子（写真14）も製作される。

12　劇終了時の献火

夜9時ごろに劇は終了するが，終了に際して，スヴァループやその日の舞台で特に重要な役割を演じた者は首に花環をかけられ，香がたかれ，その者に献火が行われる。ラーマーヤニーが献火の歌を歌い，ほら貝が吹かれ，太鼓が打ち鳴らされる。炎

写真13　クンバカルナの張子人形（撮影 横地優子）

写真14　ジャターユの張子人形（撮影 長崎広子）

の色が白と赤に変わるとその日のクライマックスで，観客は歓喜にひたって手を合わせて神々を拝む。

献火の歌には3種類のものがある。

1. 祭の始まる前の10日間：「シュリー・ラーマーヤナ・キー（『ラーマーヤナ』の献火）」
2. 1日から5日まで，16日から27日まで：「ラーム・アールティー・ホーン・ラギー・ハイ，ジャグマグ・ジャグマグ・ジョーティ・ジャギー・ハイ（ラーマの献火が行われる。ピカピカ，ピカピカ明かりが灯る。）」
3. 6日から15日まで，28日から31日まで：「アールティー・カリエー・シヤヴァル・キー，ナク・スィク・チャビダル・キー（献火をなさい，シーターの夫の。頭の先から爪の先まで美しい方の。）」

なお，第14日には2回献火が行われ，2と3の歌が歌われる。

13　藩王の城での別れの儀式

ラーマが魔王ラーヴァナとの戦いに勝利をおさめ，アヨーディヤーの町に帰還して即位すると，祭はクライマックスをむかえる。観客はラーマの即位の興奮にひたりながら，まもなく終了する祭のなごりをおしむ。なぜなら，1ヶ月間の祭の期間中ラームナガルの町に滞在した神々は祭が終わると町を去ってゆくと考えられているからである。

最終日には藩王の城で夜の7時半ごろに別れの儀式が催される。藩王と王子，その家族の者が5人のスヴァループを招いて，自ら5人の足を洗い，ティラクの印を額につけ，花環をかけ，献火を行う。また，食事をよそってご馳走する。『ラームチャリットマーナス』の最後の部分が朗誦され，5人のスヴァループ，ハヌマーン役，ラーマーヤニー，ヴァースたちは布施をもらう。藩王は再び献火を行い，スヴァループは首にかけていた花環をとって藩王とその家族にかける。

その後ラーマ，シーター，ハヌマーンは一頭の象の輿に乗り，ラクシュマナがその御者になり，別の象にはバラタとスマントラが輿に乗り，シャトルグナが御者になる。二頭の象は藩王の城を離れてアヨーディヤーに向かう。アヨーディヤーでは『ラームチャリットマーナス』の残りの個所が筆頭ラーマーヤニーによって朗誦される。最後に再び献火が行われて祭は終了する[12)]。

14　ラームナガルのラーム・リーラーの特色とその意義

ラーム・リーラーはラーマの勝利を祝うダシャーラー（アーシュヴィン月白分10日）の時期にあわせてインド各地で開催されている。中心的な地域は大体『ラームチャリッチマーナス』の分布と重なるガンジス川流域のヒンディー語圏だが，他にもハリヤナやボンベイ（ムンバイ），カルカッタ（コルカタ）ではヒンディー語の話者によって開催されている（Lutgendorf 1991: 252）。

では，他のラーム・リーラーと比べてラームナガルのラーム・リーラーにはどのような特色があるのだろうか。一般に他の地域では，この祭は町内の広場や辻でヒンドゥー教徒の住民たちが物語の有名な場面を演じる簡素な素人芝居である。ダシャーラーの当日に爆竹をしかけたラーヴァナの人形を焼いてラーマの勝利を祝う点は全てに共通している。

本稿第2節で触れたように，バナーラスで開催されているラーム・リーラーはラームナガルの祭の手本になったものだが，両者のスタイルは台詞の合間に『ラームチャリットマーナス』の朗誦が入ることと，町の各所に設けられた野外の舞台を移動しながら劇が演じられることで共通する。しかし，ラームナガルの祭がいかにも王侯貴族好みの優雅なものであるのに対して，バナーラスの方は地元住民主催の庶民的な祭といえる。例えば，神々を演じる少年たちの衣装は質素で，顔に灰を塗った化粧はラーマというよりもシヴァ派の苦行者を連想させるものである（写真15）。すぐそばでは子供たちが遊んでおり，神々を演じる者がラームナガルのスヴァループのように神聖視されるわけでもない。朗誦を担当するラーマーヤニーたちもごく普通の服装で，遅れてきて途中から朗誦に加わったり，途中で抜けたりする（写真16）。なお，いくつかの舞台を移動するという芝居の形式は他のラーム・リーラーでもみられる。例えば，首都デリーのラール・キラーの前の広場で開催されるラーム・リーラーでは，大きな広場にテントが張られて，中にいくつかの舞台が設けられる。だが，舞台を移動するとはいっても大きな広場の中での移動が多く，ラームナガルのように数キロという広大な場所で時には1時間以上もかけて舞台を移動するということは例外的である。しかし何よりもラームナガルと他の町のラーム・リーラーの違いは，他の祭は主に娯楽として提供されているが，ラームナガルのラーム・リーラーでは宗教色がきわめて強いという点である。

ラームナガルでは，祭という限られた時間と空間の中で神々の世界を再現しようと

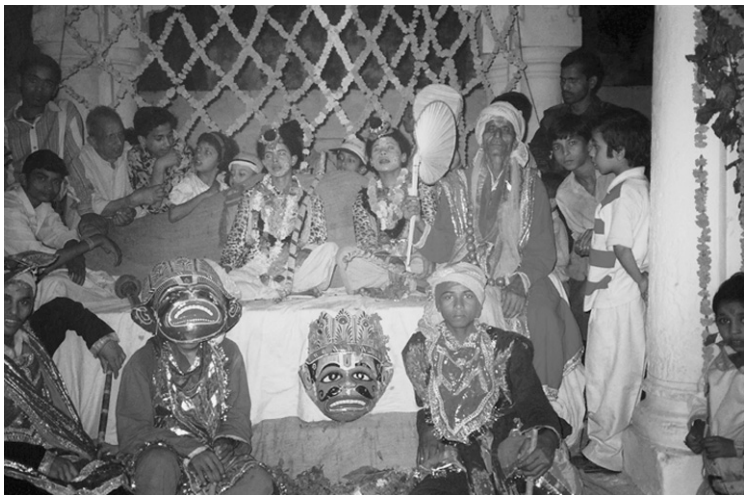


写真15　バナーラスのアッシーで開催されるトゥルシーダースのラーム・ラーリー
――中央はラーマとラクシュマナ（撮影 長崎広子）

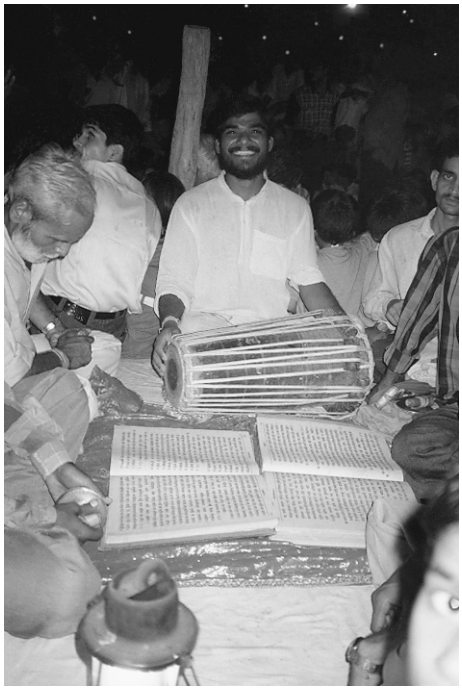


写真16　バナーラスのアッシーで開催されるトゥルシーダースのラーム・ラーリー
――『ラームチャリットマーナス』の朗誦（撮影 長崎広子）

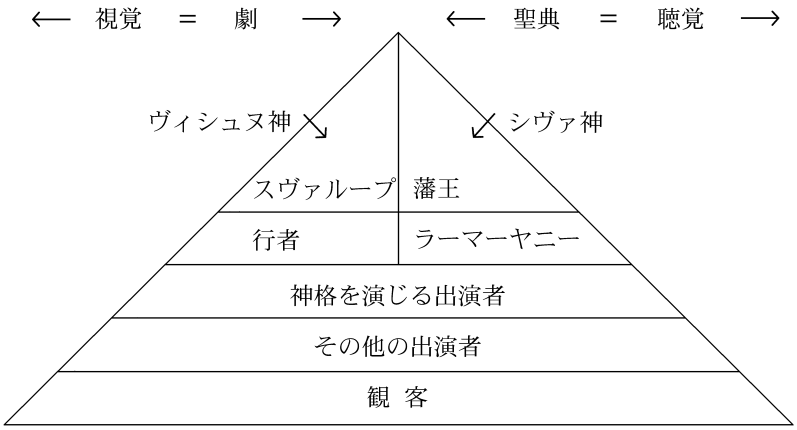
さまざまな創意工夫がなされている。物語の描写に近い場所を実際の地理上の位置関係をふまえながら舞台として選び出したり，出演者についても家柄や容姿まで役柄にふさわしい者を厳選している。このように綿密に計画された構成は芝居を効果的に盛り上げ，観客は目の前で繰り広げられる劇を見ると，あたかも本当に神々の遊戯を見ているかのような興奮をおぼえるのである。それは娯楽というよりも，あくまでも宗教的な意味合いが強いものである。以下にラームナガルのラーム・リーラーの祭の構成とその意義について考察する。

まず，劇の出演者をはじめ観客にいたるまで祭の参加者全員が神の遊戯の世界の一員として位置付けられる点に注目したい（表5）[13]。それぞれの役割に応じて神との関係が決まり，特にスヴァループは劇の中だけでなく祭の期間中文字通り神としてあがめられる特別な存在である。

なお，バナーラスの町を守るヴィシュヴァナート神がシヴァ神であることから藩王はシヴァ神の化身とされ，ヴィシュヌ神をスヴァループが代表しており，現在のヒンドゥー教の二大神格が両者によって表されていることになる。歴史的にはブラフマー神をくわえた三大神が世界の創造，維持，破壊をつかさどる神格として知られているが，時代が下がるとともにブラフマー神は勢力を失い，祭でもその他の神格という位置付けでしかない。

藩王とラーマをはじめとするスヴァループとの関係は対等でありながらも，シヴァ神である藩王はスヴァループよりも一段上にいる。それは，『ラームチャリットマーナス』でシヴァ神がラーマの神聖な行いをパールヴァティー女神に語って聞かせる

表 5　祭の参加者の位置付け



ように，藩王はシヴァ神の化身として祭を主催し，常に劇を見守り続けるからである[14)]。興味深いことに，藩王はシヴァ神としての自らの役割を常に意識しているという（Schechner 1985: 192）。

神々に忠実な僕が付き従うように，祭ではヴィシュヌ神の化身であるスヴァループには行者が，シヴァ神である藩王にはラーマーヤニーが従う。行者たちは祭の期間中常に神々の化身であるスヴァループに仕えることから，ラーマとシーターの信者と位置付けられる。行者たちのこの位置付けはかなり高いように思われるが，世を捨てた者たちはそれだけでも神聖な存在であり，中には特殊な霊能力を持つと信じられている聖者たちも含まれているからである[15)]。同様に，藩王に従うラーマーヤニーはシヴァ神の信者という位置付けになる。

その次には，スヴァループ以外の神々を演じる出演者がくる。祭の中でこれらの神々を演じる者は役の上では神々として扱われるが，演じていない時は一般の人間に戻り，サンディヤーの休憩中も神とは扱われない。

図式の中では底部を支え，祭の参加者の中で圧倒的多数をしめる観客は，ラーマの都アヨーディヤーの住民やシーターの都ジャナクプルの住民と位置付けられる。ラーマがアヨーディヤーの都を追放される場面ではラーマの後を追うようにスヴァループについて舞台を移動し，ラーマとシーターの結婚の場面では花婿側のアヨーディヤーの住民になったり花嫁側のジャナクプルの住民になったりして祝う。なお，観客個人にとってラーム・リーラーは神々の遊戯を見ることのできる貴重な機会である。そのため，彼らが神々を見るという行為にはダルシャンdarśanaという特別な言葉が使われる。「ダルシャン」とは「神々を見る」，しいては「拝む」という意味で使われる単語であるが，ちらっと垣間見るという意味で「ジャーンキーjhāṅkī」も用いられ，こちらの場合はさらに神と観客との距離は開く[16)]。

さて，劇空間の問題を次に整理してみたい。ラームナガルでは劇は町の各地にある舞台を移動しながら繰り広げられるため，時には芝居そのものよりも歩く移動の時間の方が長く，劇を楽しむという視点からみれば退屈に感じられる。だが，観客にとっては神々と同じ道を歩くことに価値があり，なぜならそれはラームナガルのラーム・リーラーにラーマの聖地を巡礼する意味もあるからである。物語の中でラーマが訪れた主な聖地は，生誕地アヨーディヤー，プラヤーガ（現アラーハーバード），チットラクート，パンチャヴァティー（現ナーシク），キシュキンダー（現ハンピ），ラーメーシュヴァル，さらには海を渡ってランカー（現スリランカ），再びアヨーディヤーとなり[17)]，現在インドではラーマ神話にちなんだこれらの聖地の巡礼が行われてい

る。ラームナガルで劇の舞台に使用される場所は，祭の期間中は単なる舞台ではなく，ラーマの聖地そのものとみなされる。劇を見ることで神々とともにこれらの聖地を順にたどることができるため，この町のラーム・リーラーに巡礼の目的で参加する者が多いという（Schechner 1993: 52-59）。

さらに，時間の問題がある。ラーム・リーラーはラーマの一生の縮図ともいえよう。1ヶ月間の祭の第1日は神の降臨，第2日から第3日の2日間はラーマの子供時代，第4日から第8日の5日間は結婚，第9日から第28日の20日間は追放と戦争，第29日から第31日の3日間はバラタとの再会と戴冠になる。ラーマの生涯は1ヶ月間に短縮されているため，祭に参加した観客は短い期間で英雄ラーマの一生に立ち会うことができるのである[18)]。

他のラーム・リーラーがダシャーラーの日に向けて数日から10日間という短い期間で演じられるのに比べると，1ヶ月間繰り広げられるラームナガルのこの祭はかなり長いものである。観客は必ずしも1ヶ月間全ての劇を鑑賞するわけではないが，1日分だけでもかなりの時間を要する。多くの人々は毎日バナーラスの町から通ってくるが，この町にはホテルがないため，遠回りをして橋でガンジス川を渡るバスで行くか，バナーラスの町の中でも南のはずれに位置するベナレス・ヒンドゥー大学の前でガンジス川の岸まで相乗りのオート力車に乗り，次に蒸気船に乗り換えてガンジス川を渡る。劇の行われる舞台が城から離れている場合は，さらに相乗りのオート力車やサイクル力車で行かなければならない。これにかかる時間は1時間以上になり，徒歩の場合に要する時間と労力ははかり知れない。劇の終了時間は夜9時ごろだが，遅くなると蒸気船の便がなくなり，手漕ぎの小船に20人あまりが相乗りしてガンジス川を渡らなければならない。

さらに，朗誦と劇というかたちでラーマ物語は多重化され，時間が延長されるという点も注目される。『ラームチャリットマーナス』の朗誦は古いヒンディー語のため一般の観客には少々分かりにくいが，朗誦の合間に劇がはさまれることで視覚でも物語を確認することができる。だが，同じ内容を朗誦と劇で二回繰り返すということは，その分時間が大幅にかかることになるわけで，それを観客たちはどのようにとらえているのだろうか。観客の中には『ラームチャリットマーナス』のテキストを持参し，読経の意味でラーマーヤニーの朗誦にあわせて読む者もいる。しかし，劇が読み書きのできない者も含めた全ての大衆に開かれたものであるとすれば，本稿第10節で述べたように，ラーマーヤニーは常に藩王のそばに座り，その朗誦は劇のかぶりつきにいる観客にはよく聞こえない。つまり，大衆よりも藩王に向けて行われていると

いう印象を与える。けれども，王の乗る象のそばで，そこだけがぽっと明るく浮かび上がった光の輪から放たれるラーマーヤニーの朗誦は，聞く者に不思議な感動を与える。筆頭ラーマーヤニー（写真 11）が筆者に個人的に語ったところによれば，祭で『ラームチャリットマーナス』を朗誦する時には，神々に乗り移られたような気分になり，自分の限界をはるかに超える声が出るという。この言葉から分かるように，朗誦は極めて神聖なものとされている。この理由は朗誦によって輪廻からの解放にいたるからだと考えられる。トゥルシーダースは作品の中で「ラーマの徳の賞賛を聞く者は生死の海を渡る」[19] と描いているが，ここで「ラーマの徳の賞賛」とは『ラームチャリットマーナス』をさしている。つまり，ラーマーヤニーの朗誦によって『ラームチャリットマーナス』を聞く観客も「ラーマの徳の賞賛を聞く者」であり，それによって「生死の海を渡る」すなわち解脱することができるのである。

では，藩王は何を目的にこの宗教劇を主催するのであろうか。よく知られているように，「ガンジス川の右岸の地は不浄の地とされ，今もそこにあるのは無人の砂洲だけである（荒 1992: 34）」。バナーラスの町はガンジス川の左岸にひらけ，川は北に向けて流れているが，藩王の城やラームナガルがあるのは右岸の不浄の地である。どうして，藩王はわざわざこのような場所に宮殿を作り，この場所でラーム・リーラーを開催するのであろうか。ラームナガルのラーム・リーラーを現地調査した演劇学者シェクナーによると，藩王の権力を領民と近隣のイスラーム領主たちに示す目的があったのではないかという（Schechner 1993: 44）。この地方の有力な収税官の息子であったバルヴァント・シンは 1740 年に藩王の地位を手に入れ，隣国との境界に位置するラームナガルに橋頭堡として城を建設させた。後の藩王たちがラームナガルでラーム・リーラーを開催したのは，ひとつには，広大なガンジス川の対岸まで多くのヒンドゥー教徒を動因することでバナーラスに住むヒンドゥー教徒やイスラーム教徒，しいては隣国のイスラーム教徒のナワーブ（太守）にも王としての力を見せつけることになるからだという。時には一日に数万人がラーム・リーラーを見に訪れる。祭の華麗さに感化された観客は主催者である藩王をシヴァ神に重ねあわせ，この祭の宗教的な教化によって領民の心は団結するのである。さらに，今もラーマーナンド派の行者が数多く参加し，期間中藩王によって無料で食事と宿泊場所を提供されるが，ラトゲンドルフの指摘によると，多くの行者が祭に参加することで，不浄の地にあるラームナガルが聖地に転ずるという。しかしここには別の理由が隠されており，ラーマーナンド派の行者は 18 世紀ごろに藩王の軍隊の傭兵として仕えることがあったため，軍事力の誇示の目的で藩王は近隣のラーマーナンド派の聖地（チットラクート，

ジャナクプル，アヨーディヤー）から行者を招待したとも考えられる（Lutgendorf 1991: 261）。このように祭の目的のひとつが王の軍事力の誇示にあることは，ラーマがラーヴァナを倒すダシャーラーの日に城の蔵から古い大砲などの兵器が出され，門前の大通りでパレード（写真17）が行われることからもうかがえる（Shechner 1993: 44）。

15　結　　語

以上，1998年のラームナガルのラーム・リーラーを中心に祭の詳細を示してきたが，最後に現在の開催状況についても触れておきたい。ヴィブーティ・ナーラーヤン・シン王はラーム・リーラーの開催に力を注いできたが，藩王国制度の廃止から財政難に直面し，祭の規模は年々縮小されてきた。ラームナガルの人々は昔のラーム・リーラーやダシャーラーの日の兵器パレードがいかにすばらしかったかということ，また現在の藩王の財政難についてよく口にする。今後の祭の存続を危ぶむ声が多いなか，2000年12月にヴィブーティ・ナーラーヤン・シン王が亡くなった。2001年の祭は新王アナント・ナーラーヤン・シン（写真18）によって引き継がれたが，ラーム・リーラーを愛した亡き王をしのんで悲しみにしずんだ祭であったという。

写真17　ダジャーラーの日のパレード（撮影 長崎広子）

写真18　祭に参加する皇太子時代のアナント・ナーラーヤン・シン王（撮影 長崎広子）

筆者は文化人類学や演劇学の専門家ではないが，ヒンディー文学を研究する者として，この祭の詳細を日本に紹介することができるのではないかと考えて本稿を著した。他の地域の祭との比較の際に本稿が研究資料として役立つならば幸いである。

謝　　辞

紹介した写真の一部は京都大学助教授の横地優子氏よりお借りしたものである。この場を借りてお礼申し上げます。

注

1）　ラーム「ラーマ」，ナガル「町」。現代ヒンディー語では潜在母音の a は語末や長母音の前で落ち，「ラーマ」も現代ヒンディー語では「ラーム」と発音されるが，特定の単語に関しては日本の慣例に従ったカタカナ表記にした。他のもののカタカナ表記は発音に近いものを付し，ヒンディー語のローマ字転写は米国議会図書館（LOC）方式に従った。

2）　歴代藩王の在位年は資料によって幾分異なるが，ここでは Nārāyaṇa（1993: 259）及び <http://www. uq.net.au/~zzhsoszy/ips/b/benares.htm> を参照した。

3）　叙事詩『ラーマーヤナ』では一英雄であったラーマが『ラームチャリットマーナス』でヴィシュヌ神の化身としての一面が強調され，この作品は北インドを中心にヴィシュヌ派ラーマ信仰が確立するうえで重要な役割を果たし，この宗派の聖典となっている。

4）　台詞（サンヴァード）の言語については現代ヒンディー語の基礎となったカリーボーリー・ヒンディー方言に近く，バナーラス地方のボージプリー方言ではない。また，トゥルシーダースの『ラームチャリットマーナス』のアヴァディー方言の影響も受けているが，宗教的なヒンディー語は現代語であってもトゥルシーダースの言語から何らかの影響を受けている（Hess 1983）。

　なお，シーターの婿選び式で訪れるジャナクプルではその地方語ミティラー方言が使われている。

5）　本稿で紹介した写真は，劇の妨げにならないように主に途中休憩中に撮影した。なお，スヴァループや筆頭ラーマーヤニー（ラームジー・パーンデーヤ氏）の写真はラームナガル在住のパンディットであるラージャーラーム・ドゥヴィヴェーディー氏のご尽力で撮影と録音をさせていただいた。

6）　図2は，Sax（1993: 272）の fig.1 と Hess（1988: 47）の地図を参考にして，筆者が作成した。

7）『ラームチャリットマーナス』2.312.d1

8）「サンディヤー」とは，文字通りは日出と日没をさし，サンディヤーの礼拝は『マヌ法典』2章101と『ヤージュニャヴァルキヤ法典』第1巻97,123で朝夕2回であるが，『ヴリハトサンヒター』34章8で朝昼夕の3回になっている。

9）『ラームチャリットマーナス』は7章約1074節からなるかなりの長編で，カーシー藩王は代々写本の収集や校訂を奨励してきた。現在インドで一般に普及している『ラームチャリットマーナス』はギーター・プレス版（Poddāra 1947）であるが，ヴィブーティ・ナーラーヤン・シン王が校訂を命じた版はカーシラージ版（Miśla 1962）とよばれ，本稿で付した『ラームチャリットマーナス』の章と段落番号はこの版によるものである。

10）　ラーマーヤニーが朗誦する写本は筆頭ラーマーヤニーであるラームジー・パーンデーヤ氏の所有するもので，筆者に直接語ったところによれば，同氏の先祖が藩王の写本から書き写したものであるという。

11）　16拍からなるヒンディー固有の韻律。なお，中世ヒンディーの韻律に関する詳細は，長崎（2000: 73-89）参照。

12）　祭で生じた朗誦の不備を補う意味で，この後10日間城内のハヌマーン寺院で『ラームチャリットマーナス』の朗誦が行われ，最後にアヨーディヤーでハヌマーンに対する礼拝があり，完全に祭は終了する（Nārāyaṇa 1993: 258）。

13）　表は Schechner（1985: 157）の提示した藩王とスヴァループの対立関係を参考にし，これに自らの見解をくわえて作成した。

14）　王妃がパールヴァティー女神と位置付けられることはなく，祭への関与は時には車で来て，中から観劇する程度である。

15）　祭の期間中，行者たちは公設宿舎に滞在し，無料の食事を提供されるが，これらの費用は全て藩王が負担する。

16）　Schechner（1993: 61）によれば，神々が動かずにじっとしている姿を見る時には，「ジャーンキー」という単語が使われるという。そのため，劇終了時に献火を受けるスヴァループが神像のように不動の姿勢でいる姿を拝むことはジャーンキーになる。

17）　ラーマ物語の中でラーマが訪れた場所と実際の地理との関係については諸説があり，この問題は Singh（1991: 39-46）が詳しく論じている。

18）　ラーム・リーラーがラーマ物語の縮図であることは，Schechner（1993: 26）が指摘しており，

詳しく図式化されている。

19）「ラーマの徳の賞賛は，全ての吉兆を与えるものである。それを恭しく聞く者は，船に乗らずとも生死の海を渡る。」『ラームチャリットマーナス』5.60.d1

文　　献

荒松雄

1992 『インドとまじわる』東京：中央公論社（初出は1982年，東京：未来社）。

Eck, Diana L.

1991 Following Rama, Worshipping Śiva. In D.L. Eck and F. Mallison (eds.) *Devotion Divine*. pp.49-71. Groningen: Egbert Forsten.

Hess, Linda

1983 Rām Līlā: The Audience Experience. In M. Thiel-Horstmann (ed.) *Bhakti in Current Research, 1979-1982.* pp.171-194. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.

1988 *The Ramlila of Ramnagar: An Introduction and Day-by-Day Description.* Berkeley and Varanasi: Anjaneya Publications. (revised 1991)

Kapur, Anuradha

1990 *Actors, Pilgrims, Kings and Gods: The Ramlila at Ramnagar.* Calcutta: Seagull.

Lutgendorf, Philip

1991 *The Life of a Text: Performing the Rāmcaritmānas of Tulsidas.* Berkeley: University of California Press.

Miśla, Viśvanāthaprasāda (ed.)

1962 *Rāmacaritamānasa*. Vārāṇasī: Kāsīrāja Durga.

長崎広子

2000 「ラームチャリットマーナスに用いられる韻律」『東海仏教』45: 73-89。

Pāṇḍeya, Govinda Nārāyaṇa

1993 *Śrīrāmalīlā.* Ilāhābāda: Śrīmatī Jñānavatī Pāṇḍeya.

Poddāra, Hanumānaprasāda (ed.)

1947 *Śrīrāmacaritamānasa.* Gorakhapura: Gītāpresa.

Prinsep, James

1833 *Benares Illustrated in a Series of Drawings.* Calcutta: Smith, Elder & Co.

Sax, William S.

1993 The Rāmnagar Rāmlīlā: Text, Performance, Pilgrimage. In R.P.B. Singh (ed.) *Banāras* (*Vārāṇasī*)*: Cosmic Order, Sacred Hindu Tradition*. pp.257-273. Varanasi: Tara Book Agency.

Schechner, Richard

1985 *Between Theater and Anthropology.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

1993 Crossing the Water: Pilgrimage, Movement, and Environmental Scenography of the Ramlila of Ramnagar. In B.R. Hertel and C.A. Humes (eds.) *Living Banaras: Hindu Religion in Cultural Context.* pp.19-72. Albany: State University of New York Press.

Singh, R.P.B.

1991 Rāma's Route after Banishment: A Geographic Viewpoint. *Journal of Scientific Research, Special Volume* 41(B): 39-46. Banaras: Banaras Hindu University.